

体験回避と非行傾向行為

—家族における心理的居場所を含めて—

石津憲一郎

体験回避と非行傾向行為

—家族における心理的居場所を含めて—

石津憲一郎

Experiential avoidance, belongingness of family and adolescent delinquency.

Kenichiro ISHIZU

キーワード：非行, 体験回避, 居場所感, 中学生

Keywords : delinquency, experiential avoidance, belongingness of family, junior high schoolstudents.

I. 問題と目的

体験回避 (experiential avoidance) とは, Acceptance & Commitment Therapy (以下, ACT) と呼ばれる第3世代の認知行動療法におけるキーコンセプトであり, 様々なメンタルヘルスにおける問題を予測しうる概念として近年注目されてきた。体験回避は, ネガティブな感情や思考, 感覚を悪いものである捉え, それを感じないようにしたり, 排除したり, 逃れようとする対処スタイルや態度のこととされる (Hayes, Wilson, Gifford, Follette, & Strosahl, 1996)。ACT における精神病理のモデルは「心理的非柔軟性」を想定しており, そこでは上記の「体験回避」を含みつつ, 他にも「価値の混乱」, 「行為の欠如」, 「認知的フュージョン」, 「概念としての自己への執着」, 「非柔軟な注意の持続」の6つのコアプロセスを想定している (Hayes, Barnes-Holmes, & Roche, 2001)。心理的非柔軟性の対照となる (逆の) 概念が ACT の目指す心理的柔軟性であり, それまでの心理療法全般と大きく異なり, ストレスや脅威となる刺激そのものをコントロールしたり, 変化をさせたりすることによる症状の緩和そのものは狙いとしていない。心理的柔軟性を高めていくことは, 生きていくために立ちほかかる問題や課題に対し, そこから回避することなくより効果的に反応する力 (Harris, 2009) を発揮することで, 避けることができない痛みや苦痛は時に受け容れながら, 有意義で豊かな人生を切り拓くことにある。つまり, 心理的非柔軟性とは, 痛みや苦痛の除外やコントロールに没頭することで, かえってそれに囚われてしまうことや, そこから逃げることに専念するあまり, 有意義で豊かな人生を切り拓くことから離れて行ってしまうことにある。心理的非柔軟性の一つのプロセスである「体験の回避」は, 特に様々な行動レパトリーの制限することに繋がっていくことが想定され (熊野, 2009), それゆえ,

ある個人にとって有意義で大切にしたいと思う生き方が狭められていってしまうことが問題とされる。ACT は成人を対象とした心理療法から出発しつつ, 近年では児童から青年期を対象にその臨床や基礎研究の幅を広げてきた。

ACT におけるコアプロセスの中で, 非常に多くの研究が蓄積されているのは, 上記の体験回避と認知的フュージョンである。Greco, Lambert & Baer (2008) はこの体験回避を測定するために, 「自分の考えや気持ちは, 私の人生を台無しにしてしまう」や「自分の気持ちが怖い」といった項目からなる Avoidance and Fusion Questionnaire for youth (AFQ-Y) を開発し, その信頼性と妥当性を検討した (日本語版は, Ishizu, Shimoda, & Ohtsuki, 2014)。これによって, 青年期を対象とした研究も次第に蓄積されつつある。この AFQ-Y を使った研究として, 例えば, Venta, A., Sharp, C., & Hart, J. (2013) によれば, 体験回避はアレキシサイミアと感情調整の困難さを媒介することが示され, また, 体験回避は抑うつ, 不安, 境界性パーソナリティ傾向それぞれと正の関係をもつだけでなく, 体験回避を媒介させると抑うつや不安と, 境界性パーソナリティ傾向との関連がなくなる (Sharp, Kalpakci, Mellick, Venta, & Temple, 2015)。また, Venta, Hart, & Sharp (2012) によると, 体験回避は不安や感情障害といった内在的な問題だけでなく, 問題行動といった外在化された問題とも関連をもつ。さらに, こうした体験回避に影響を与える要因として, 家族間の葛藤を取り上げ, そのことによって抑うつが高まることを示した研究もある (Biglan, Gau, Jones, Hinds, Rusby, Cody, & Sprague, 2015)。

日本人を対象とした思春期から青年期にかけての体験回避と様々な適応との関連性についてはほとんど研究されていないが, Ishizu, Shimoda, & Ohtsuki (2015) は,

3週間の期間の短期縦断的な研究によって、体験回避はストレス反応を予測するだけでなく、体験回避から影響を受けたストレス反応やストレッサーは、また次の回避につながるという悪循環モデルを見出している。

このように思春期から青年期においても、体験回避とメンタルヘルスについての検討は行われてきており、その多くが、抑うつや不安といった心理的問題の発生や維持に影響を与えていることを示してきた。また、少ないながらも問題行動や、それと関連する境界例パーソナリティ傾向といった外在的問題との関連も指摘されてきている。成人を対象とした研究では、望んでいない気分や対象から逃れるべく、薬物やアルコールといった外在化された問題との関連は検討されてきたが（例えば、Kashdan, Barrios, Forsyth, & Steger, 2006）、思春期におけるこうした外在化された問題との関連は非常に少なく、日本における検討は、現在のところ行われていない。

外在化された問題には反社会的な問題行動や非行をあげることができる。文部科学省（2015）の児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査によると、学校内外における暴力行為の件数はとくに中学生において高い割合で推移しており、小学生においては上昇傾向を示すことも明らかとなっている。もっとも警察庁（2015）によれば、刑法犯少年は平成17年以降、ほぼ一貫して減少しており、少年全体が反社会化してきているは言えないものの、刑法犯少年の再犯率は上昇している。非行少年や虞犯少年といった、反社会的な問題行動を行う者の多くが、大きなストレスを抱えていることが知られて久しい。例えば藤野（1996）では、非行直前の少年たちは、抑うつや不安、無気力といったストレス反応得点が高く、非行直後にストレス反応得点が低くなっている。ここから藤野（1996）は、松本（1990）を参考に、非行が苦痛を回復させるための対処となっていることを考察しつつ、非行以外の対処スタイルを提供する必要性を指摘している。また、望月・伊藤・原田・野田・松本・高柳・中島・大嶽・田中・辻井（2014）は、攻撃性や抑うつは非行傾向のリスク要因にもなることを指摘している。こうした抑うつや攻撃性といった心理的問題は、環境因からも影響を受けており、またそうした環境因は直接的にも非行に影響を与えることが示されてきた。例えば、小保方・無藤（2006）によれば、非行傾向行為には逸脱した友人関係や学校享受感の低さからも影響を受けること、藤野（1996）は成育歴が安定しておらず、サポートの少ない者ほどストレス頻度が高まりやすいこと、また、そうした者は特に、非行直前になるとストレスが非常に高まることを示している。家庭環境については古くからの研究があるが、松村（2002）によれば、葛藤を多く抱えている家族の子どもも多くは、家庭外に安らげる居場所を求めるとし、そのことが逸脱した友人関係に結びつくことを指摘している。このように、環境因とストレス、

非行を含めた外在化された問題とは、互いに関連しながら影響を与え合っていることが示されてきた。

本研究では、こうした環境因として、家族における心理的居場所感、また非行傾向行動を行う者に特徴的なストレスの高さに影響を与える要因として体験回避を設定する。ストレスの大きさが非行少年に広く見られることを踏まえた場合、体験回避は心理的問題のみならず、問題行動にも影響を与えている可能性がある。また、ストレッサーによっても体験回避は高まるため（Ishizu et al., 2015）、体験回避や非行は、嫌悪的な状態から離脱するための一つの回避的な対処スタイルとしても想定することができる。嫌悪的な状況を受け止めることは、ある種のネガティブな感情が自分の中に生起していることを認めることである。それゆえ、そのことに由来する悩みが個人の中に生じるが、体験回避は苦痛や悩みが生じないように、感情や思考を排除することで、嫌悪的な状況に直面しないようにする対処である。非行少年は「悩むことができる心の力」としての「抑うつに耐える能力」の発達が十分でない（河野，2006）ことも鑑みると、個人の中に生起しうるネガティブな思考や感情から逃れようとする傾向である体験回避は、「悩みを抱えられない」という視点からも、非行に影響することが予測される。さらに、嫌悪的な状況に個人が陥った際の居場所のなさは、より不安を喚起し自己制御の在り方に影響を与えうる要因である。居場所感のなさは不安や抑うつに繋がるストレス因としても機能しうること、そうしたストレス因から回避的に自己を制御するために体験回避や非行傾向が高まることで、問題行動が生じるという一つのプロセスを仮定することができる。

本研究の目的を簡潔にまとめると、中学生を対象とし、体験回避と家族における居場所感が非行傾向行為との関連性を検討することである。具体的には、居場所感が非行と体験回避に与える影響および、体験回避が非行傾向に与える影響を検討することとする。

II. 方法

調査協力者 中部地方の中学校に調査を依頼し、1460名（男子699名、女子760名、不明1名）のデータを分析の対象とした。調査協力者の平均年齢は13.29歳で、SDは1.02歳であった。

調査時期・手続き 201X年に質問紙調査を行った。質問紙は学活の時間に担任によって一斉に配布され、その場で回収した。

倫理的配慮として、調査実施前に調査協力者に対して、調査への回答は強制ではないこと、内容や個人情報は保護されること、回答はすべてデータ化され分析されること、回答内容は研究者以外の人が見ることは決してない事、それゆえ成績等には一切関係がない事を明記し、担任によって口頭でも説明を行ってもらった。

調査内容

1) 非行傾向行為の経験の有無 (11 項目)

非行傾向行為の項目内容は、小保方・無藤 (2005a, 2005b) の非行傾向行為の経験の有無に関する項目と加藤・大久保 (2006) の、問題行動の経験から 6 項目を選定し、ダミー項目 5 項目を加えて作成した。“あなたは次の行動をここ 3 ヶ月のうちにしたことがありますか”という教示に対し“ある”, “ない” の 2 件法で回答を求めた。分析には、6 項目のうち、一つでも非行傾向行為が含まれている場合、非行傾向有として扱った。

2) 家族関係における居場所感 (20 項目)

青年版心理的居場所感尺度 (則定, 2007) を使用。各項目について“あなたがふだん、家族 (ふだん一緒に生活している人) に対して感じていることを教えてください”という教示を与え、家族について回答を求めた。“まったくあてはまらない (1) ~ “とてもあてはまる (5)” の 5 件法で回答を求めた。本研究においても先行研究と同様に居場所を「役割感」「安心感」「本来感」「被受容感」の 4 つの因子から捉えることとした。

3) 体験回避 (8 項目)

Ishizu et al (2014) による日本語版の Avoidance and Fusion Questionnaire を使用した。“自分の考えや気持ちは、私の人生をダメにする”といった各項目について、“全くそう思わない (0)” ~ “とてもそう思う (4)” までの 5 件法で回答を求めた。AFQ は単因子構造であることが確認されており、本研究でも 1 因子として合計得点を使用した。

III. 結果

まず、体験回避と居場所感との関連を検討するために、AFQ と居場所感の 4 因子との相関係数を算出した (Table1)。その結果、AFQ と居場所感の 4 因子との間には、負の相関が示された ($r = -.20 \sim -.22, p < .01$)。さらに、居場所感の 4 因子を独立変数、AFQ を従属変数とする重回帰分析を行った (Table2)。その結果、AFQ に影響を与えていたのは、居場所感における「役割感」と「安心感」であった (それぞれ $\beta = -.19, \beta = -.19, p < .01$)。

そして、居場所感と AFQ の非行に対する影響力を調べるために、非行の有無を従属変数、性別と年齢 (以上、

Table1 変数の記述統計量と相関係数

	M	SD	1	2	3	4	5
1 役割感	18.53	4.79	—				
2 安心感	20.72	4.54	.78**	—			
3 本来感	23.42	5.98	.83**	.90**	—		
4 被受容感	15.80	3.80	.83**	.86**	.87**	—	
5 AFQ	9.98	6.19	-.23**	-.20**	-.20**	-.20**	—

** $p < .01$

デモグラフィック変数)、居場所感の 4 因子、AFQ を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。なお、ここでのロジスティック回帰分析では、階層性を設け、デモグラフィック変数をステップ 1、居場所感の 4 因子をステップ 2、最後に AFQ をステップ 3 とすることで、それぞれの変数の影響性を判別した。分析の結果、ステップ 2 における ΔR^2 は .09、ステップ 3 における ΔR^2 は .03 であり、どちらも有意に説明率は増加していた ($p < .01$)。最終のステップ 3 の結果から、非行の有無に影響を与えていた要因としては、年齢 ($\beta = -.37, p < .05$)、被受容感 ($\beta = -.23, p < .01$)、AFQ ($\beta = .06, p < .05$) であった (Table3)。

IV. 考察

本研究の目的は、居場所感と体験回避、非行傾向との関連を検討することであった。まず、居場所感と体験回避の関連を検討したところ、居場所感と体験回避は関連性があることが示された。その中では特に、「役割感」

Table2 重回帰分析結果

独立変数/従属変数	AFQ	
	β	VIF
性別	.07**	1.022
年齢	.04	1.023
役割感	-.19**	3.893
安心感	-.19**	5.882
本来感	.03	6.800
被受容感	.03	4.983
R^2	.10	
F	33.66**	
自由度	4	

** $p < .01$

Table3 非行傾向に影響を与える要因 (階層的ロジスティック回帰分析)

	β	R^2	ΔR^2	OR	VIF
ステップ 1		.06	.06		
性別	.44			1.55	1.02
年齢	.37*			1.45	1.02
ステップ 2		.15	.09**		
役割感	.04			1.04	3.98
安心感	-.03			0.96	6.08
本来感	.07			1.07	7.25
被受容感	-.23**			.79	5.94
ステップ 3		.18	.03**		
AFQ	.06*			1.06	1.06

** $p < .01$ * $p < .05$

と「安心感」が体験回避を低めるように作用することも示された。石本(2010)によると、「関心をもたれている」や「役割がある」といった自己有用感としての家族内の居場所感、女子中学生においては自己受容に、男子中学生には充実感といった心理的適応に影響を与えていることが示されている。こうした家族内における役割感、本研究結果からは、体験の回避を低減させる効果をもっていたことから、こうした居場所感、家族に居場所感を感じる事ができないものほど、非行化することで外に居場所を求めるといふ松村(2002)の指摘を改めて確認できたと考えられる。家族の中での居場所感、様々な要因から影響を受けると考えられる。一般的に、子ども自身は自らの力で家族の在り方や家族内力動をコントロールすることは難しい。実際に市村(2002)も例示するように、夫婦間の葛藤は子どもの非行に影響を与える代表的な要因と考えられる。また、このことを非行傾向の子どもの抑うつ得点は高さに関連させれば、川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤(2008)が示すように、夫婦間葛藤は、子ども自身がそれに巻き込まれているという感覚や、両親との情緒的な結びつきを介し、抑うつに影響を与える。菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村(2002)もまた、子どもの抑うつに影響を与える要因を検討しているが、それによると、父母の養育態度(暖かさ)よりも家族機能の良好さが抑うつにより影響を与える要因であることが示されている。子ども自身が、抑うつ状態から抜け出すには、夫婦間の葛藤から巻き込まれない必要があり、そのためにはよい子を演じたり、過剰適応したり、非行化したりすると推察できるだろう。また、Biglan et al(2015)が示すように、夫婦間葛藤は体験回避も高めるよう作用する。夫婦間葛藤が居場所感にも体験回避にも、さらにそれらは抑うつにもつながることを鑑みると、家族内葛藤からは抑うつに陥ることを避けるべく、非行傾向の子どもたちは非行化しているという流れを想定することもできるだろう。

本研究では、最後に階層的ロジスティック回帰分析を行い、非行傾向(ある/なし)への、居場所感と体験回避の影響性も検討した。その結果、直接的に、非行傾向に影響を与える要因としては、本研究からは居場所感の中でも「被受容感」と体験回避が挙げられた。ここでの被受容感には、無条件に愛されている・受け入れられている感覚を含み、条件付きではない愛情という意味では、非統制的な関係性も含むと考えられる。内海(2013)は、青年期の養育態度を改めて概観しつつ、あらたな尺度を作成しているが、そのうち本研究における「被受容感」に近い概念である「受容」や「心理的統制」と、子どもの行動について検討している。それによると受容は仲間関係や多動、向社会性に影響を与え、心理的統制はそれらに加え、リスク行動(喫煙経験)を高めるように作用

することが示されている。心理的統制には「期待に背くと私を見ない」や「親の気持ちを悪くさせると、また親を喜ばせるまでは私に話しかけなくなる」といった、高い統制性(支配性)を含んでおり、そこでの親子の愛情関係は無条件ではなく、条件付きと言える。本研究からも、無条件に受け入れられているという感覚のなさが、非行傾向に直接影響を与えており、統制から逃れるべく、非行化する子ども像が垣間見えると言えよう。また、こうした受容の低さや統制性の高さは抑うつ傾向にも影響をあえていたことから、非行と抑うつとの関連については、ここでも示唆されたと言える。

抑うつと関連性が示されてきた体験回避も、弱い影響力ではあったが非行傾向を説明する要因として示された。抑うつと体験回避について長期的な関連性を示した研究(Berking, Neasiu, Comtois, & Linehan, 2009)によれば、体験回避の減少に伴い抑うつも減少することが示されている。本研究では確かに体験回避は非行傾向に影響を与えていたものの、その影響は弱かったことを考えると、抑うつなどの内面的ないし心理的問題を要因に加えた場合、体験回避の直接的な影響力がどのようになるのかを改めて検討する必要があるだろう。一方で、内在化された問題と外在化された問題は、「心理的問題」と「問題行動(反社会的行動)」として区別されることが多いが、本研究結果を踏まえた場合、必ずしもそれらは別の問題ではなく、互いに関連し合っている場合があることも示されたと言えるだろう。

以上から、抑うつと非行の関連性における、体験回避と居場所感の位置づけが推察されるが、非行においては「抑うつに耐える能力」という視点も加味されて考えられる必要がある。確かに、特に女子においては抑うつの上昇が非行傾向の増加に影響を与える(Kofler, McCart, Zajac, Ruggiero, Saunders, & Kilpatrick, 2011)ように、抑うつは非行のリスクになり得るが、実感としてあるように、非行傾向の者には罪悪感とセルフコントロールの欠如の希薄化も見られる。河野(2006)は、自分の行動を振り返り、反省したり悩んだりすることで罪悪感もつことは、人のある種の抑うつ状態に陥らせるが、抑うつに陥ることを過度に避けようとする心性は、そのまま罪悪感や思いやり、自らの行動を振り返るという意味を含めてのセルフコントロールを低下させる可能性を示唆している。家族内葛藤など、様々な要因によって抑うつに陥った子どもたちは、何らかの形でその抑うつに対処すると考えられる。一方で、抑うつを過度に回避するような心性は「抑うつに耐える能力」の低下を招き、共感性や罪悪感をも低下させることで非行化につながるケースがあると考えられる。近藤・岡本・白井・栃尾・河野・柏尾・小玉(2008)によれば、抑うつに耐える能力は「孤独に耐える力」「不安に向き合う力」「強がらずに自己開示する態度」の3因子から構成され、サポートネットワークとも関連することが示されている。

本研究で測定した体験回避は、ネガティブな感情を含めた悩みを抱えることからの回避を含み、また、居場所は一種のサポートネットワークと捉えることができる。河野 (2006) は、罪悪感を実感するためには自己がそれに対処できるくらいに発達している必要があるとしていることから、自己の発達を無視し、体験回避や悩みを抱える力を伸ばすことは難しいと推察できる。

本研究結果から、上記の考察を得ることができるが、その一方で、本研究には以下の課題も存在している。まず、重回帰分析とロジスティック回帰分析をそれぞれ行っており、居場所感が AFQ に影響を与えうること、AFQ は居場所感を統制しても非行に影響を与えていたが、AFQ が居場所感と非行傾向とを緩衝するのか否かといった点は検討できておらず、今後は、より統合的なモデルについて検討していく必要がある。また、本研究は環境因と体験回避といった個人的特性のみから子どもたちの非行傾向を検討している。非行に大きく関連すると思われる反社会行動を表面化させる人格障害の一つにサイコパシー傾向がある。このサイコパシー傾向は「一次性サイコパシー」と「二次性サイコパシー」の2つの側面から大別されている (大隅・金山・杉浦・大平, 2007)。一次性には共感性や他者操作と言った側面が、二次性には衝動性の制御の弱さ、非行経験などが含まれる。杉浦・佐藤 (2005) によれば、日本語版作成のプロセスで、一次性はさらに利己性と冷酷性に分かれることを示している。本研究では、こうした一次性サイコパシーに見られるような冷淡さや利己性といった情動障害や他者操作性については扱っておらず、これらと関連する他者の苦痛に対する自律神経系の反応といったデータを含めた検討が必要になってくると考えられる。

本研究結果から、居場所感と体験回避とは互いに関連すること、またそれらは非行傾向に影響を与えることが示された。居場所や自己が発達する場所が確保されることで、悩みやネガティブな思考を個人に留める力が身に付き、そのことがまたサポートネットワーク等に繋がるという循環が心理的援助の基本的な方針となると考えられる。さらに、そのことが ACT の目指す、生きていく上で出会う困難や課題に効果的に反応し、有意義で意味のある人生を送っていくことに繋がるのだと考えられる。

V. 引用文献

- Berking, M., Neacsiu, A., Comtois, K. A., & Linehan, M. M. (2009). The impact of experiential avoidance on the reduction of depression in treatment for borderline personality disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 663-670.
- Biglan, A., Gau, J. M., Jones, L. B., Hinds, E., Rusby, J. C., Cody, C., & Sprague, J. (2015). The role of experiential avoidance in the relationship between family conflict and depression among early adolescents. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 4, 30-36.
- Greco L. A., Lambert, W., & Baer, R. A. (2008). Psychological inflexibility in childhood and adolescence; Development and evaluation of the Avoidance and Fusion Questionnaire for Youth. *Psychological Assessment*, 20, 93-102.
- Harris, R. (2009). *ACT Made Simple: An Easy-To-Read Primer on Acceptance and Commitment Therapy*. Oakland, CA: New Harbinger.
- Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (2001). Relational frame theory: A post-Skinnerian account of human language and cognition. New York: Plenum.
- Hayes, S. C., Wilson, K. G., Gifford, E. V., Follette, V. M., & Strosahl, K. (1996). Experiential avoidance and behavioral disorders: A functional dimensional approach to diagnosis and treatment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 1152-1168.
- 藤野京子 (1996). 少年非行のストレスについて 教育心理学研究, 44, 278-286.
- 市村彰英 凶悪な非行 —重大少年時間の家族関係を観る— 心の科学 (特別企画) 非行臨床 (生島浩 編) 日本評論社
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究 21, 278-286.
- Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. (2014). Developing the scale regarding psychological inflexibility in Japanese early adolescence. Poster presented at 30th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Honolulu.
- Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. (2015). Effects of experiential avoidance and cognitive fusion on psychological stress responses among Japanese adolescents. Poster presented at Association for Contextual Behavioral Science World Conference, Berlin.
- Kashdan, T. B., Barrios, V., Forsyth, J. P., & Steger, M. F. (2006). Experiential avoidance as a generalized psychological vulnerability: Comparisons with coping and emotion regulation strategies. *Behaviour Research and Therapy*, 44, 1301-1320
- 加藤弘通・大久保 智生 (2006). 問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係: 困難学級と通常学級の比較から 教育心理学研究, 54, 34-44.
- 川島亜紀子・眞榮城 和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, 56,

- 353-363.
- 警視庁 (2015). 少年非行情勢 <https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikoujousei/H26.pdf>
- Kofler, M. J., McCart, M. R., Zajic, K., Ruggiero, K.J., Saunders, B. E., & Kilpatrick, D. G., (2011). Depression and delinquency covariation in an accelerated longitudinal sample of adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 79, 458-469.
- 近藤淳哉・岡本英生・白井利明・枋尾順子・河野莊子・柏尾眞津子・小玉彰二 (2008). 非行からの立ち直りにおける抑うつに耐える力とソーシャル・ネットワークとの関連 *犯罪心理学研究*, 46, 1-13.
- 河野莊子 (2006). 非行の語りと心理療法—「抑うつに耐える能力」を中心に— 生島 (編) 現代のエスプリ 非行臨床の課題 至文堂
- 松村 励 (2002). 家族臨床の立場から 心の科学 (特別企画) 非行臨床 (生島浩 編) 日本評論社
- 熊野宏昭 (2008). アクセプトランス&コミットメント・セラピー Q&A 集 (熊野宏昭・武藤 崇 (編集) ころのりんしょう à la carte ACT = ことばの力をスリとかわす新次元の認知行動療法 星和書店)
- 松本良枝 (1990). ストレスと非行 *犯罪心理学研究*, 28, 76-80.
- 望月直人・伊藤大幸・原田新・野田航・松本かおり・高柳伸哉・中島俊思・大嶽さと子・田中善大・辻井正次 (2014). 中学生の非行行為と攻撃性, 抑うつとの関連. *精神医学*, 56, 4-11.
- 文部科学省 (2015). 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/_icsFiles/afiel_dfile/2015/10/07/1362012_1_1.pdf
- 則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 *日本教育心理学会総会発表論文集*, 337.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005a). 中学生の非行傾向行為の先行要因—1 学期と 2 学期の縦断調査から— *心理学研究*, 77, 424-432.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005b). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 *発達心理学研究*, 16, 286-299.
- 大隅尚広・金山範明・杉浦義典・大平秀樹 (2007). 日本語版一次・二次サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 *パーソナリティ研究*, 16, 117-120.
- Sharp, C., Kalpakci, A., Mellick, W., Venta, A., & Temple, J. R. (2015) First evidence of a prospective relation between avoidance of internal states and borderline personality disorder features in adolescents, *European child & adolescent psychiatry*, 24, 283-290.
- 菅原 ますみ・八木下 暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山 葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連: 家族機能および両親の養育態度を媒介として *教育心理学研究* 50, 129-140.
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary psychopathy Scale の妥当性 *日本心理学会第 69 回大会発表論文集*, 407.
- 内海 緒香 (2013). 青年期養育態度 (PAS) の作成 *心理学研究*, 84, 238-246.
- Venta, A., Sharp, C., & Hart, J (2012). The relationship between anxiety disorder and experiential avoidance in inpatient adolescents. *Psychological Assessment*, 24, 240-248.
- Venta, A., Hart, J., & Sharp, C. (2013). The relationship between experiential avoidance, alexithymia and emotion regulation in inpatient adolescents. *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, 18, 398-410.

(2016年 8月25日受付)

(2016年10月 5日受理)